

W・B・イエイツ論(IV)

— 神話の詩法(i) —

錢 本 健 二

序

一九三一年九月から、イエイツはラジオ放送をとおし、彼の詩についての考え方を自作にもとづいて解説するようになり、間断しながら、こうした放送は彼の死の二年前の一九三七年四月まで、いわば体力の許す限り続けられた。そのうち一九三四年三月十七日にBBC放送のベルフアースト支局から放送された講演の内容が同年四月『リスナー誌(The Listener)』に「詩人の成長 (“The Growth of a Poet”)」と題して⁽¹⁾掲載された。そこでイエイツはアイルランドの伝承文学に取材した彼の詩五篇を朗読し、自分の詩人としての成長の跡を回想している。その内容を要約すると、彼はその成長の過程を三段階に分け、第一段階では、伝承文学の特徴である簡潔な表現を身につけるため、農家をまわり、英語やゲール語で歌われ、語られる物語や古い民謡を聴いて歩いた。そうした成果が「柳園のはとび」(“Down by the Salley Gardens”)[「妖精の唄 (“A Faery Song”)]」「マウニーの胡弓弾き (“The Fiddler of Dooney”)]などの詩作品となった。第二段階は、第一段階よりずっと

後年になって、伝承文学の方法に戻る時期があつて、言葉は簡潔であっても深い思想性と緊密さ(intensity)をもった詩を求めるようになり、ゲール語の本に取材した「楽園に駆ける (“Running to Paradise”)]」となつて結実した。第三段階では現代的な詩を書くことが求められて、複雑な思想を論争的にかつ情熱的で苦渋に満ちたものとして表現することが求められるようになった。そこで、アイルランドの民衆の生活と風土に根ざしながら、伝承文学に直接取材するのではなく、理念的な人物像を想像し、造形したのが、「漁師 (“The Fisherman”)]」である。以上のような内容であるが、注目されるのは、第一段階において、イエイツがアイルランドの伝承文学に直接間接に影響をうけて創作した作品がどのような広がりをもち、どのような内容のものであつたかという問題であり、第二に、一九一三年頃伝承文学的手法に帰る時期があつたこと、およびその第二段階と第三段階の典型として朗読した二つの作品の制作年代を調べてみると、“Running to Paradise”が一九一三年九月の作品であり、“The Fisherman”が一九一四年六月の創作であつて、その間が一年未満であることであろう。いわば一九一三—一九一四年のうちにイエイツの詩に一つの変化があつたことを認める内容である。詩集によつてこ

の年代を表わすなら、主として一九二二―三年の作品を収めた詩集『責任 (Responsibilities)』(一九二四年)と主として一九二四―二八年の作品を収めた詩集『クール湖の野生の白鳥 (The Wild Swans at Coole)』の間である。ここでは第一の問題についてだけ考えてゆきたい。

伝承文学に直接取材した作品としてイエイツがあげている三篇のうち「柳園のはとりで」をとりあげて、伝承歌謡とイエイツの作品を比較してみよう。伝承歌謡はシェファーズの『全詩集註解』⁽²⁾にある通り四連から成っているが、イエイツはそのうち二連のみをそのもと唄としている。比較のために英語のまま引用する。

伝承歌謡 “The Rumbling Boys of Pleasure” の第二第三連。

II

Down by yon flowery garden my love and I we first did meet.
I took her in my arms and to her I gave kisses sweet.
She bade me take life easy just as the leaves fall from the tree.
But I being young and foolish with my own darling did not agree.

III

The second time I met my love I vowed her heart was surely mine.
But as the weather changes my darling girl she changed her mind.
Gold is the root of evil although it wears a glittering hue:
Causes many a lad and lass to part though their hearts like

mine be e'er so true.

イエイツの作品 “Down by the Salley Gardens” の全詩に。

Down by the salley gardens my love and I did meet;
She passed the salley gardens with little snow-white feet.
She bid me take love easy, as the leaves grow on the tree;
But I, being young and foolish, with her would not agree.

In a field by the river my love and I did stand,
And on my leaning shoulder she laid her snow-white hand.
She bid me take life easy, as the grass grows on the weirs;
But I was young and foolish, and now am full of tears.

この二つを比較してすぐ気がつくのは、恋人の美しさを描く鮮やかな詩句第一連の「小さな雪のように白い足 (little snow-white feet)」、第一二連の「彼女の雪のように白い手 (her snow-white hand)」がもと唄にはなく、そこでは彼女の像は不分明なままにおかれていることである。そしてもと唄の第三連における教訓的詩句を切り棄てて、第一連の「葉が木に生えるように (as the leaves grow on the tree)」と対句になる、「草が堰に生えるように (as the grass grows on the weirs)」と牧歌的な比喩を生かし、また最終行では一連の「しかし若くて愚かな私は彼女の言葉をきかなかつた」と対句になる「しかし私は若く愚かだったので、今は涙にくれている」を置いて、恋人の美しさと若者の愚か

さ故の嘆きを鮮やかに対応させて、美しい作品に仕上げている。イエイツはこのもと唄を故郷スライゴのバリソダール(Ballysodare)村の老いた農婦の切れ切れの唄から再構成し、それにもと唄を生かす工夫を加えて、一篇のバラッドに再生させたのである。この唄がアイルランド自由国軍のマーチとなっていることを誇らしげに報告するイエイツの喜びを理解できる。イエイツは詩人として古代神話を含む伝承文学を出発点として成長したが、現代詩人イエイツの中にそれがどのように生かされていったかを、彼の最初期の作品にさかのぼって考えることにする。

I 伝承文学の蒐集

イエイツの処女詩集『アシーンの放浪とその他の詩(The Wanderings of Oisín and Other Poems)』(一八八九年)に収められた最初期の短い詩は、一八九五年の『詩集(Poems)』に取捨選択されて収められる時、「十字路("Crossways")」と小見出しがつけられ、そのまま全詩集版のタイトルとなった。「十字路」とは、「多くの路筋をためた」試作品であるという意味でつけられたという。⁽⁴⁾全詩集版の自註にあるとおり二十才までの作品はもっぱらインドと牧人や牧神を主題としていたが、『アシーンの放浪(The Wanderings of Oisín)』を書きはじめた二十才の時(一八八五年)からアイルランドの神話や伝承文学に主題を集中するようになったと回顧している。⁽⁵⁾イエイツの詩人としての揺籃期をアイルランドものに主題を集中しはじめる一八八五年からダブリンにアイルランド文芸協会を設立した一八九二年に仮に区切ってみると、その間彼は四つの大きな渦のなかで生きた。一つは練金術や心霊術など神秘学に傾倒

したことであり、一つはアイルランドの独立を目指すナショナルリズム運動に参加したことであり、もう一つはアイルランド伝承文学の蒐集活動を行ったこと、そして最後に世紀末文学者や象徴主義詩人たちの交友が深まったことがあげられる。これらがたがいにからみあいイエイツの詩人としての基礎を形成した。しかしこれらのうちのこの間の文学者としての成果は主にアイルランドの伝承文学の影響から生れ、詩作、伝承文学蒐集、自伝的散文作品、伝承文学の再話、現代アイルランド詩人のアンソロジー編集、創作、そして評論とその多様な活動には驚嘆すべきものがある。それぞれの領域を図表にまとめながら、その主要な特質を引き出して考えてみたい。

イエイツの伝承文学研究はまず先行する研究者や蒐集者たちの著作を読むことから始まった。一八八七年五月(推定)のジョン・オリアリー宛の手紙でゲール語からの民話や民謡の翻訳者として知られるダグラス・ハイド(Douglas Hyde, 1860-1949)の名が見える。「私はダグラス・ハイドのものにどこか似たもう一つのスライゴの物語にもとづくバラッドを同封します。これは彼に暗示を受けたのではなく、永い間心にとめていたものです。」⁽⁶⁾このバラッドはその頃書かれた「オハート神父のバラッド("The Ballad of Father O'Hart")」と推測される。このハイドはアイルランド民族運動の中心である「ゲール同盟」(一八九三年設立)の創設者の一人で、一九三八-四五年には大統領職にあった民族主義者であり、ゲール文学の翻訳はこうした政治活動の原動力であり、また一つの政治的主張でもあったことがわかる。イエイツは一八八八年九月六日以後(推定)の手紙でキャサリン・タイナンに宛てて、「ハイドはすべてのアイルランド民俗学者のうちで最高の人だ。彼の文

体は完全であり、実に誠実で簡潔で、学者ぶったところがない」と絶讃している。一八八七年にかけてイエイツは多くの先行する蒐集者の成果を大英博物館で渉猟し、筆写してゆくが、その莫大な蒐集の中には、厳正な聞き書きから再話、また単に伝承に取材した創作も含まれ、また雑誌の記事にまで及んでいる。イエイツは一貫してこうしたさまざまな姿勢を許容していった。それにもとづいてイエイツは三冊の民話伝説集を編集した。後に考える再話作品も含めて表Ⅰにまとめた。そしてその出典となった著書については『アイルランド農民の妖精物語と民話集』と『アイルランド妖精物語』の巻末に付された参考文献の主なもの年代順に整理して作ったのが表Ⅱである。⁽⁸⁾ イエイツもこれら二冊に“A Stolen Child” “The Priest of Colony” という民話に取材した二つの詩作品と“A Fairy Enchantment”と題された聞き書き（話者マイケル・ハート）を載せている。そして合計して八十篇近くの作品をアイルランドの伝承文学の全体を鳥瞰できるように次のような分類項目のもとに編集した。

『アイルランド農民の妖精物語と民話』

- | | |
|--------|---------------|
| 群なす妖精 | 青春の国 |
| 取り替えっ子 | 聖者・司祭 |
| 人魚 | 悪魔 |
| 孤独な妖精 | 巨人 |
| 幽霊 | 王・女王・王女・伯爵・盗人 |
| 悪女・妖術師 | |
- 『アイルランド妖精物語』
- 大地と水の妖精

邪悪な精霊

猫

王と戦士

このゆるやかな分類は厳密なカテゴリーにもとづくものでないことは明らかで、イエイツのねらいが、読者が自国の誇るに足る伝承文学の全体を概観するのに便利なようにということだけではなく、先行した蒐集者たちが民話に対して、時にユーモアを重視したり、またアイルランドを楽土として謳歌したり、妖精への真摯な信仰をもって描く姿勢だったり、死者と魂へのケルト的な宗教観を強調するもの、農民の生活を基盤にしたもの、ゲール語また、創作民謡を重視するものなどそれぞれであるが、それらの偏見を批判し去るのではなく、逆にアイルランド民話に対する編者たちのヴィジョンをとおして、彼らが生きた時代の姿をたどり、民族の真の姿を見出すことができるように編集することだったという。最初の編著書の序文でイエイツは次のように書く。

アイルランド民話のさまざまな蒐集者たちは、私たちの見方からすれば大きな美点をもち、また他の見方からすれば大きな欠点をもつ。彼らは彼らの仕事を科学よりも文学であるとし、人類の原始宗教とかその他民俗学者が後にあれこれと求めるようになる領域について語るよりも、アイルランドの農民について語っている。科学者になろうと考へたら、彼らはすべての話を八百屋の値段表のような形式に表示して、第一項妖精の王、第二項女王、とでもしなければならなかったらう。彼らはそうはせず、民衆の声、生命の脈搏そのものをとらえ、それぞれの話の中に、その時代に最も顕著な姿を表現させたのである。⁽⁹⁾ この分類にあえて原則のようなものを求めるとすれば、アイルランド伝

表I イェイツによって蒐集(再話)または編集された伝承文学関係の著書および報告

出版年	書名(題目名)および出版場所
1887	<i>Poems and Ballads of Young Ireland</i> , Dublin.
1888	<i>Fairy and Folk Tales of the Irish Peasantry</i> , London.
1889	<i>Stories from Carleton</i> , London.
1891	<i>Representative Irish Tales</i> , 2vols, London
1892	<i>Irish Fairy Tales</i> , London
"	<i>The Countess Cathleen and Various Legends and Lyrics</i> , London.
1893	<i>The Celtic Twilight, Men and Women, Dhoul's and Fairies</i> , London.
1896	"The Cradle of Gold"* from <i>Senete</i> , Nov., 1896. Dublin
1897	<i>The Secret Rose (Stories of Red Hanrahan)</i> , London'

* イェイツによるスライゴアの民話の聞き書き(再話)

表II イェイツが伝承文学を編集する時出典となった主な著書

出版年	著者, 書名および出版場所
1825—28	Croker, T. Crofton, <i>Fairy Legends and Traditions of the South of Ireland</i> , 3 vols, London.
1831	Lover, Samuel, <i>Legends and Stories of Ireland</i> , Dublin.
1840	Hall, Mrs S. C., <i>Stories of the Irish Peasantry</i> , Edinburgh.
1846	Hall, Mr and Mrs Samuel C., <i>Ireland: Its Scenery, Character, Etc.</i> , London
1847	Walsh, Edward, <i>Irish Popular Songs</i> , Dublin.
1853	Wilde, Sir William, <i>Irish Popular Superstitions</i> , Dublin.
1867	Kennedy, Patrick, <i>The Banks of the Boro</i> , Dublin.
1870	Kennedy, Patrick, <i>The Fireside Stories of Ireland</i> , Dublin.
"	'Lageniensis' (John O'Hanlon), <i>Irish Folklore: Traditions and Superstitions of the Country</i> , Glasgow.
"	'Lageniensis' (John O'Hanlon), <i>Legend Lays of Ireland</i> , Dublin.
1875	Carleton, William, <i>Tales and Stories of the Irish Peasantry</i> , New York.
1878—80	O'Grady, Standish J., <i>History of Ireland</i> . 2 vols, London.
1887	Wilde, Lady, <i>Ancient Legends, Mystic Charms and Superstitions of Ireland with Sketches of the Irish Past</i> , London.
1888	McAnally, D. R., <i>Irish Wonders: The Ghosts, Giants, Pookas, Demons, Lepre-chawns, Banshees, Fairies, Witches, Widows, Old Maids, and Other Marvels of the Emerald Isle</i> , Boston.
1890	Wilde, Lady, <i>Ancient Cures, Charms, and Usages of Ireland</i> , London.
"	Curtin, Jeremiah, <i>Myths and Folk-Lore of Ireland</i> , London.
"	Hyde, Douglas, <i>Beside the Fire: A Collection of Irish Gaelic Folk Stories</i> . London.

説の最も古い層から順に配列してあるといえる。またそれぞれの項に簡単な説明がされているが、読者の便宜をはかる以上の目的をもっていない。イエイツは民俗学の科学的研究がその端緒について、やがて精緻なモチーフ分類表が支配するようになるこの領域の動向にあえて背を向け、文学と民衆と風土との結節点に立って想像力の根源を手探りしている。イエイツはこうした編集作業を通して伝承文学への基本的姿勢を身につけ、やがて自分で叔父ジョージ・ポレックスフインの協力をえながら、同家の女中であり民話伝承者であるメアリー・バトルの話を蒐集し、スライゴーでの他の蒐集も含めて再話したのが、『ケルトの薄明り』(The Celtic Twilight) (一八九三)である。イエイツが同家に滞在したのが、一八九二年の夏から翌年春にかけてであるが、占星術や魔術に通じた叔父と幻視能力をもつメアリーの様子は『自伝』の第一書「夢想」の第十七章と第二書「垂絹の揺ぎ」の第三巻「カメレオンの道」の第五章に描かれている。幻視者メアリーの語りは次のようであったという。

メアリー・バトルは窓からロシズ岬を眺めながら、この土地の言い伝えによると大きな石塚の下にメイヴ女王が葬られているというノックナリーから「今まで見たこともない美しい婦人が山際から真直ぐにこちらに進んで来るのが見える」と言った——私はその時書いた記録を引用しているのですが——「彼女はとても強そうに見えるが悪意はないようだ」(すなわち残忍そうではない)「私はアイルランドの巨人を見たことがある」(市場で見られる大男)「そして彼は美男だけれど彼女と関わりはない。彼は太っていて、とても騎士らしい歩きぶりではない……彼女が腹がないかと思えるほどほっそりしているが、肩幅は広く、見たことのないほど美しい。三十才くらいに見える」私が

彼女のような人を他に見たことがあるかときくと、髪を下げた人は違った様子だが、新聞で見るとまどろむ貴婦人たちにずっと似ている。髪を上げた人はよく似ている。他の人は長い白衣を着ているが、髪を上げた人は短かいドレスを着て、ふくらはぎまで足が見える……美しいりりしい顔をしていて、二人三人と剣を振りながら騎馬を駆って山腹を下る男たちのようだ。今はこんな人たちはいない。美しい姿の人はいない……彼女とその貴婦人たちを思うと、着物の正しい着方も知らずに駆けまわる幼児みたいだ。そう、女とは呼びたくない¹⁰⁰」

イエイツの蒐集と聞き書きの様子が髣髴とする記述である。聴きながら、ふさわしいと思われる別の形容詞を探してメモしている所など、忠実な再現を聞き書きの場ですではずれようとしている。そしてこのように妖精の女王メイヴと妖精たちの英雄的貴族的な姿を幻視するトランス状態の口調が伝わってくる。イエイツ自身もこの時よりも三、四年後に「象徴を意識的に使わずに、短かい間だけれどはるかに生き生きとした幻覚が訪れ、これら信じがたい美しさをもつ二、三の姿を見た。それは特に私の記憶にいつもつきまとうようになった」¹⁰¹とその後日譚を書きそえている。エドワード・ガネット宛の一八九二年九月(推定)の手紙でも、叔父とメアリーの二人が妖精を呼び出す儀式をして成功し、トランス状態でさまざまな妖精の姿と声と不思議な音楽を聴いたことを報告している¹⁰²。このように死者たちへの呼びかけ、風土を介した超越的な存在者との交感とその儀式に沿って想像力の発想のプロセスが形成され、イエイツにあってそれへの不動の信頼が詩人としての生涯を一貫したものにした。

イエイツがもう一度伝承文学と深い関わりをもったのは、一八九七年

表Ⅲ レディ・グレゴリーの伝承文学関係の著書

出版年	書名
1902	<i>Cuchulain of Muirthemne</i>
1904	<i>Gods and Fighting Men</i>
1906	<i>A Book of Saints and Wonders</i>
1909	<i>Kiltartan History Book</i>
1910	<i>Kiltartan Wonder Book</i>
1918	<i>Kiltartan Poetry Book</i>
1920	<i>Visions and Beliefs in the West of Ireland, 2 vols</i>

W・B・イエイツ論(Ⅳ) 錢本健一

の夏、レイディ・グレゴリーの邸クール・パークに滞在し、彼女の民話蒐集に協力したことがある。民話の宝庫である西アイ

ルランドのゴルウェイ地方の中心にあるクール・パークは絶好の足場であった。近所の農家を訪問しては民話を採集する作業はモード・ゴンへの恋に心身共に傷ついたイエイツに健康を回復させるよい機会を与えた。またアイルランドの流離譚『赤毛のハンラハン物語 (Stories of Red Hanrahan)』(一九〇四年改訂出版)を含む『秘密の薔薇 (The Secret Rose)』の出版を曲折の後やっと実現させた年にも当って、彼女の良き協力者となった。レイディ・グレゴリーの著作のうち、神話・伝説および民話の紹介や蒐集をしたものは表Ⅲのようになる。このうち『ムルヘヴナのクフリン』と『神々と戦士たち』にはイエイツは力の入った序文を寄せている。(後に『批判と序文』に収められた) また二人の蒐集の成果はずっと後年になって出版された『アイルランド西部の幻想と信仰』でこれには註解と二つのエッセイを寄せている。そしてイエイツはこの註解の執筆を終える一九一五年六月をもって、伝承文学との直接的な関わりを終えることになる。

イエイツは評論活動においても、伝承文学と深く関係し、先人の業績を継承し、後進を育てることに心をくだいた。そして伝承文学の蒐集を奨励し、その本質を解明する地味な努力を自ら続けただけでなく、そうした豊かな題材を現代の文学活動に生かす創造をも積極的に進めた。ここでは、サミュエル・ファーガスン (Samuel Ferguson) やレイディ・グレゴリーのように創作的詩作品や劇についての書評は除いて、伝承文学についての評論と蒐集や再話にかかわる評論や書評を、作品集と未集成散文集から抜き書きすると表Ⅳのようになる。このうちほとんどは求められて書いた書評であるが、イエイツ自身が民話編集にたずさわった一八八八―一九三年からレイディ・グレゴリーに協力して民話を採集し編集に協力していた一八九七―一九〇二年の間にまとまった文章が多いのは当然であろう。特にレイディ・グレゴリーと採集した素材にもとづいて、一八九七年に書かれた「ダヌーの部族」以後「消失」(一九〇二年)までの六篇は長篇の連作論文で、アイルランド民話と超自然的体験に関するイエイツの考察の集大成である。この内容に細かくふれることはできないが、アイルランドの具体的な風土の中に生きる古代の神々や妖精たちへの信仰、治療神としての魔女や人さらい現象、また転生への信仰など目の前の農民たちの中に生きている伝承をとおして知ることのできるアイルランド民族宗教の最古層のところに「死者の最大で最上のものたち

表IV イェイツの伝承文学関係の評論

発表年	表 題	内 容
1888	Introduction to <i>Fairy and Folk Tales of the Irish Peasantry</i>	自著への序文。
1889	Irish Fairies, Ghosts, Witches, etc.	ブラバッキイ夫人の主催するロンドン神霊協会の機関誌 <i>Lucifer</i> に発表。
1889	Irish Wonders	David R. McAnally, <i>Irish Wonders</i> (1888) の書評。
1889	William Carleton	イェイツの編集になる <i>Stories from Carleton</i> (1889) の紹介。
1889	Popular Ballad Poetry of Ireland	イェイツ初の本格的なアイルランドバラッド論。
1890	Bardic Ireland	Sophie Bryant, <i>Celtic Ireland</i> (1889) の書評。激情的な文章。
1890	Carleton as an Irish Historian	<i>The Nation</i> 誌の <i>Stories from Carleton</i> の書評 (Dec. 28, 1889) への反論。
1890	Tales from the Twilight	Lady Wilde, <i>Ancient Cures, Charms...</i> (1890) の書評。彼女は O. Wilde の母。
1890	Poetry and Scene in Folk-Lore	<i>The Academy</i> 誌での前記 Wilde 夫人の著書への書評に対する反論。
1890	Irish Fairies	イェイツのアイルランド妖精論。スライゴーでの蒐集の経験をふまえた長文の評論。
1891	Irish Folk Tales	D. Hyde, <i>Beside the Fire</i> (1890) についての力の入った書評。
1892	Introduction to <i>Irish Fairy Tales</i>	自著への序文。
1892	Invoking the Irish Fairies	<i>The Irish Theosophist</i> 誌への寄稿。
1893	The Message of the Folk-Lorist	T. F. Thistelton Dyer, <i>The Ghost World</i> (1893) への書評。
1893	Old Gaelic Love Songs	D. Hyde, <i>Love Songs of Connacht</i> (1893) の書評。
1894	The Evangel of Folk-Lore	William Larminie, <i>West Irish Folk Tales</i> (1894) の書評。
1895	Battles Long Ago	Standish O'Grandy, <i>The Coming of Cuculain</i> (1895) の書評。
1895	The Story of Early Gaelic Literature	D. Hyde, <i>The Story of Early Gaelic Literature</i> (1895) の書評。
1895	The Three Sorrows of Story-telling	D. Hyde の同名の著書（ゲール語の民話の英訳）の書評。
1896	Greek Folk Poesy	Lucy M. Garnett, <i>New Folklore Researches. Greek Folk Poesy</i> (1896) の書評。
1896	Miss Fiona Macleod as a Poet	Fiona Macleod, <i>From the Hills of Dream</i> (1896) の書評。
1897	The Tribes of Danu	長篇連作評論の第一論文。

1897	Miss Fiona Macleod	Fiona Macleod, <i>Spiritual Tales</i> (1897) の書評。
1897	Mr. Standish O'Grady's Flight of the Eagle	同名の著書への書評。O'Grady の <i>History of Ireland</i> (1878-80)への敬愛による。
1898	The Prisoners of the Gods	同 第二論文。
1898	The Broken Gates of Death	同 第三論文。
1898	Celtic Beliefs about the Soul	K. Meyer & A. Nutted, <i>The Voyage of Bran</i> (1895, 1897)への書評。重要論文。 <i>Folk-Lore</i> 中の Bryan J. Jones の論文についてのイエイツの註解である。学会機関誌に発表。
1899	Notes on Traditions and Superstitions	民俗 Fiona Macleod の同名の著書 (1899) への書評。
1899	The Dominion of Dreams	長篇連作評論の第四論文。
1899	Ireland Bewitched	Daniel Deeney, <i>Peasant Lore from Gaelic Ireland</i> (1900) の書評。
1900	Irish Fairy Beliefs	上記連作評論の第五論文。
1900	Irish Witch Doctors	同 第六論文(最終)。
1902	Away	Lady Gregory の同名の著書への書評。
1902	Cuchulain of Muirthemne	同 上
1904	Gods and Fighting Men	Lady Gregory, <i>Visions and Beliefs in the West of Ireland</i> へ掲載した論文。
1914	Witches and Wizards and Irish Folk-lore	

が彼ら「農民たち」の間に存在する¹⁰³という「死者たちの生者たちへの近さ (nearness)¹⁰⁴」を見ることにイエイツの論点がひきしばられてゆくことは興味深い。この信仰はイエイツの晩年まで彼の中で生きつづけたことは「自作への総序」の中にその証拠を見ることができる。

私は今では、クルル湖の森番がなぜここ百年間一頭の鹿も通ったことのない湖の岸辺で一頭の鹿の足音を聞いたのか、なぜある狂った老司祭が自分の生涯のうちだれも天国へも地獄へも行っていない、なぜなら古いラスの砦が彼らを入れてしまったのだと言ったのかがわかるよ

うに思う。死者たちは彼らが生きたところかまたはその近くにとどまり、祝福や刑罰といった抽象的な領域を求めず、いわば彼らの近所の隠れた特質の中に引きこもったのだというのだ。……やがて新しい科学を習ばねばならなくなった時こそ、ヨーロッパ人はユダヤ教ではなくドクトリッド教を背景にして立ち、死んだ歴史の中に封じこめられたキリストではなく、流れるような生きた具体的な現象としてのキリストに何ほどこか魅力を感じるようになるだろう¹⁰⁵。イエイツの詩作とアイルランドの神話伝承の間に通底する情緒や基本的

な構造について考えを進めてみたい。

II 英雄神話の基本構造

先に述べた六篇の連作評論のうち最初の「ダナ族の国々」の冒頭は、連作全体の総序といえるもので、イエイツの評論のなかでも最も美しい文章である。以下前半だけを引用するが、生きた神話と詩人との接点を語って間断するところがない。

家の戸口から、古き時代の英雄や美しい女たちが幸不幸のうちに生きた山々やまだ神々に見棄てられていない静かな処を見ることのできる詩人は、ホーマーが幸福であったと同じように幸福である。もし自分の国に不死の存在や神秘なものを見出せない詩人は、自分の国やさほど離れていない隣国よりも遙かに遠い国々について書かねばならぬことが多い。というのも詩のつかの間の知的情熱は不死の存在の神秘のうち生きるからだ。自分の国を描かなければ、身のまわりの湖水や山々そしてそこに生かされている生き物たちはあるべき美しさをそこなうことになる。そして詩人もまたそれ以上に孤独になるであろう。なぜなら、人々が自分たちの生活の中に彼を思い出させるものを少しも思い出せず、彼の方も自分の作品の中に彼らのことを思い出させるものを少しも思い出せず、世界と詩とが共にたがいの存在を忘れてしまつことになるからだ。彼が靈的情熱をもてばもつほど、彼はますます孤独になるだろう。なぜなら、もし『縛めを解かれたプロメシウス』の伝説と風景とが、人々が子供の頃からよく知っている伝説や風景であるか、あるいはシェリーが子供の頃から知り、多くの記憶的情熱で

満たした伝説や風景であったなら、この作品をこれ以上よく読み記憶する人はいないだろうから。靈的文学 (spiritual literature) の作家は、それが単純な祈りや嘆きの文学でない限り、自分のまわりの国を聖地とすることになると思う。靈的文学でないものはたぶん消えうせている今、私たちはユダヤ人がパレスチナをインド人が北インドをギリシヤ人がイオニアの海辺の国を聖地にしたように、私たちの国を聖地としはじめねばならない。¹⁰⁰

一八九七年十一月に発表されたこの文章は当時滞在していたレディ・グレゴリーのもと、クール・パークを眼の前にして書かれたことは、伝承文学の地をたたえる冒頭の文章で推測される。そして神話と文学を架け渡す典型として、イエイツはシェリーに言及することで自己の姿勢を整えている。『自伝』のなかでも、「もしシェリーがかのプロメテウスかそれに等しい象徴をどこかウェールズかスコットランドの岩にくぎづけにしたなら、彼の芸術はもっと新しく、いわばもっと宇宙的に私たちの思想のなかに入り、たぶん現代の詩に古代の詩のもつ幅と安定とを与えたであろう」と語っている。そして一九〇〇年に発表され、イエイツ初期を代表するに足るすぐれた評論「シェリーの詩の哲学」はシェリーの作品にみられる象徴を分析することによって、『縛めを解かれたプロメシウス』を「世界の聖典のなかでもはるかに確かな根拠となる聖典 (sacred book)」と考へ、その神話の構造的解釈を試みた論文である。この頃は彼がアイルランド伝承文学研究の集大成をする時期であり、同時に神話・伝説に取材した詩作品のあるべき姿、特にその構造的性質が問題になった時期である。「文学におけるケルト的要素」(一九〇二)も同じ時期に書かれたすぐれた評論であるが、M・アーノルドの『ケルト文

学研究 (*The Study of Celtic Literature*)』など当時の文学における汎ケルト主義とでも呼べる崇拜熱に乗った情緒的な傾向には一定の距離をとっていた。アーノルドの主張を自分の言葉で言い直して、ある留保をおく慎重な姿勢、民俗学的基礎に立った批判的発言などにそれを見ることができるが、シェリー論ではそれがより明確になっている。イエイツは彼の基本的姿勢を次のように表明する、「詩を唯一永遠のものと考え、それを詩人たちのこしらえものとして退けずに、それがある規則的な秩序に配列しはじめるべきだ」⁽⁴⁾。この「規則的な秩序」を象徴の解明によって試みることになるのである。この評論は二章から成り、そのそれぞれの章の主題がイエイツの神話理解の本質を明らかにすると同時に、イエイツの詩の構造をも照らすに十分な内容をもつ。

第一章「彼の支配的理念」では、神話(詩)は不滅の生命との一致の瞬間、「時」が「永遠の墓」に運ばれる「無時間」の体験を歌うものだという。彼がシェリーの詩句を引用しながら説いている美しい文章がある。

『縛めを解かれたプロメシウス』の中で彼(シェリー)は聖者が恍惚のうちにみるように、世界の大洋の中を何の危険をも恐れることなく、船が、

波に映る花の光

ただよう香り

柔らかい音楽にひかれて

進み、緑のものから毒が消え、あらゆる生き物から残酷さが消え、ひきかえるやとかげさえ美しくなって、やがて「時」が「永遠の墓」に運ばれるのを見る。

W・B・イエイツ論(IV) 錢本健一

これによって、あらゆるものがある種の「肉体の復活」に参与するこの美、この神聖な秩序は、すでに死者たちの眼、恍惚の魂には見え、なぜなら恍惚はある種の死なのだから。⁽⁵⁾

イエイツはシェリーからこうした恍惚の時、善悪の世界を超えて、死者たちと共有する時間を歌った詩句を引用し、鑑賞しながら、アイルランドの風土、土地の語りのなかに置かれると、その神秘的な歌が「信仰の時代の甦り」「この地方の人々の信仰と同じほど素朴で古い信仰を新しい時代に適合した形式で語っている」ことを知る。恍惚という生命の根源的一致を死者たちとの出会いとして受けとめるイエイツの生命観は、降霊術などの神秘主義思想と結びついて、イエイツの詩で独特の展開を見るようになる。アイルランドの古い信仰の根源に「死者たちの生者たちへの近さ」を見たことは先に述べたが、そうした信仰を背景に死者たちまたは超越者との出会いを執行する者としての英雄像が形成されてゆく。カール・ケレーニーが著『ギリシャの神話——英雄の時代』の序文で、英雄神話は厳格な祭儀行為としての英雄崇拜をその起源にもち、大きくは死者の支配者である冥界の神々に捧げられたのと同じ崇拜が小型化したものという。すなわち歴史時代のギリシャの英雄崇拜の先駆けはミューケナイの墓群に立証されるように死者崇拜であり、「記憶の祭祀を……女神ムネーモシユネーへの信頼を証明しているのである。おそらくある古い死者崇拜にもとづいていると思われる信仰のはるか後代の証拠によるならば、死者も個人的にはムネーモシユネーを信頼しており、冥界で彼女の泉から水を飲んだ、ということになっている。自分自身のことを思い出す者は、彼がさらにその中で生きつづけてゆく思い出に対応するのである。これはおそらくムネーモシユネーの最大の賜物で

あろう。」²⁴⁾ 古典学者ケレーニーの指摘する記憶の女神ムネーモシユネー崇拜―死者崇拜―英雄神話という古代信仰についての大筋はイエイツの神話理解の中核でもある。ケレーニーは続ける。「神的なるものが人間的なものなかに入りこみ、人間的なものが神々のところまで引き上げられて、英雄神話が現われたのである。人間そのものなかに位置づけられながらも、この神話はムネーモシユネーの二重の領域によって養われてきている。すなわちその一つは墓石の上に見られる祭祀が指示している死者の国であり、もう一つは記憶のうちに現存として残り、神的な人間を特徴づける理想性を獲得した過去である。」²⁵⁾ こうしたギリシャ神話と生きたアイルランドの伝承文学が通底していることを『わが作品のための総序』で、イエイツは次のように語っている。

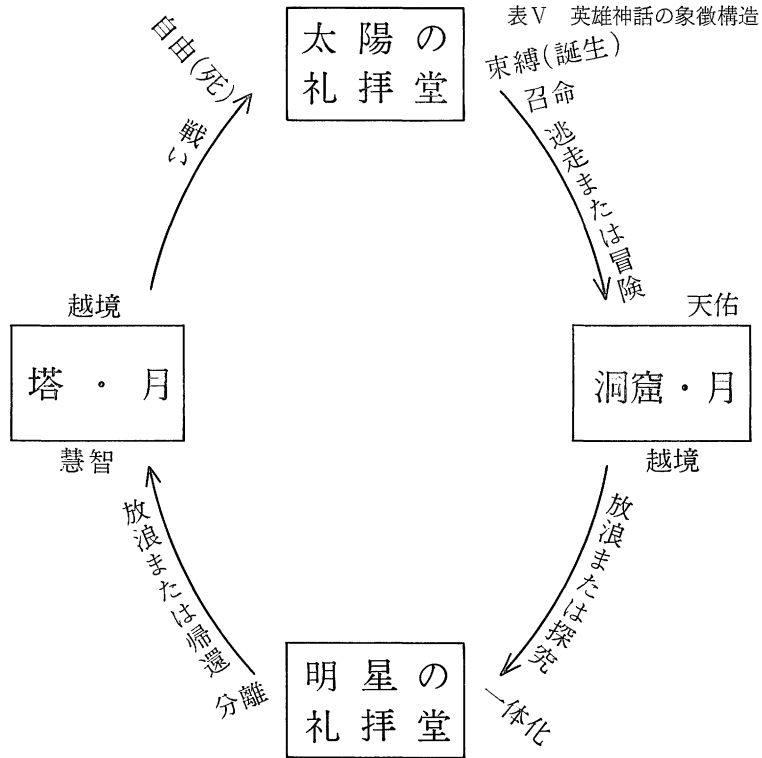
「私たちの神話、私たちの伝説は他のヨーロッパ諸国のそれとはちがう、なぜなら十七世紀の終りまで農民からも貴族からも等しく重んじられ、疑う余地のない信仰をえていたからである。ホーマーは机の上で学ぶ人々のものになってしまったが、私たちの古代の女王や中世の騎士や恋人たちは今でも行商人を身震いさせることができる。私は私の思想を……十七世紀の漂泊詩人や今日の想像上の民謡詩人の口をかき取りて歌うことができる。……私たちアイルランドの詩人は今でも、あらゆる民俗芸術はオリンパスの昔に溯及しないものはないと思っ²⁶⁾てゐる。」

第二章「彼の支配的な象徴」は神話（詩）の構造をいくつかの象徴によって説明するもので、多くの創見を含み、第一章を包みこむ大きな内容をもつ。詩人の想像力は創造物の世界を内包する「大記憶」に自己の「小記憶」を合致させることで、「大記憶」という「象徴の住処」から

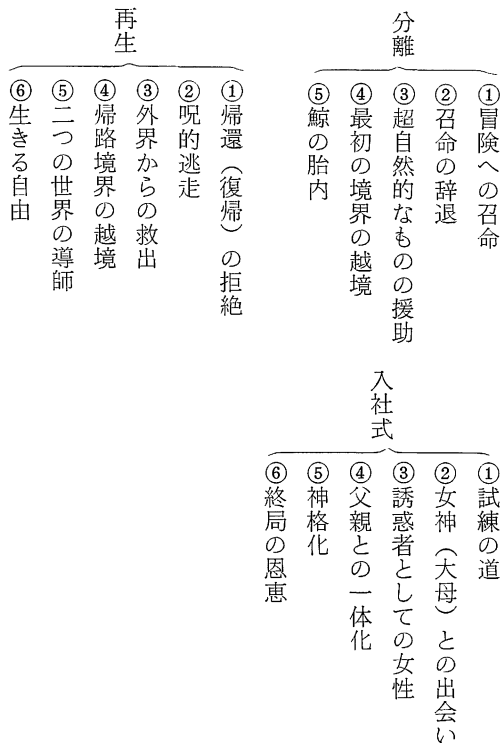
「生きた魂とも言うべきイメージ」を汲み上げる力だから、詩のことはという「創造物ではない霊に魂を一致させる」には、まずこの世界という「創造物」に魂を一致させる経験をし、そのなかから、「超越的イメージ」すなわち原型的象徴を詩的想像の基礎にすえることだと考えた。

それではシェリーは彼の作品の中でどのような原型的象徴を「象徴の住処」から汲み上げているだろうか。まずイエイツは「洞窟」の象徴をとり上げ、数多くのシェリーの詩句に言及しながら、それを生命の源である泉への通路、楽園に至る門、生の歓びの場であると説明する。そして次に「塔」の象徴について、「洞窟」が内に向けて生命そのものに向うのに対して、「塔」は外に向けて人々や事物に対する心だと言う。そして「明けと宵の明星」は守護神たる女性の象徴であり、想像を導く憧れや希望の対象であり、隠されている故に悲哀の、変幻する故に苦悩の対象でもある。そして最後に「太陽」はこの世的生の根源の表象であり、信念、喜び、誇り、活力を示し意志生活全体の象徴である。以上四つの象徴をイエイツの説明によって構造化し、神話における物語上の基本構造に重ね合わせて、いくつかの説明を書き加えると、表Vのように図表化されこの基本構造はそれぞれの時代においてくりかえし現われ、大いなる記憶から、たびたび外界に投影され、再現される。こうした円環をたどる者たちを英雄と呼んでよいと思うが、物語の中でこの四つの象徴のうちどれに重きを置くかによって、物語の構成や、主題、英雄たちの運命もさまざまな形をとることになる。そうした英雄たちの極相にあるのが「キリストとソクラテスと神聖なる少数者であり、彼らはあらゆる現世的生をしりぞけ、彼らの生涯を通じて天駆ける理想によって生み出された形象に疑うことなく従うことができ、『この世に燃える焔で

『千の顔をもつ英雄』⁽²⁰⁾が、英雄たちの冒険譚の構造について示唆を与えてくれる。キャンベルはその序章で、英雄を個人の生活空間と時間を超えて普遍妥当性をもった人間の規範的なありかた(元型)を戦いとするの



に成功した世界象徴の搬送者たちだと定義したあと、英雄物語は、イニシエーションの儀式構造を拡大したもので、世界からの分離——なんらかの力の源泉への参入——活気溢れる帰還という構造をもつという。その儀式の基本過程「分離——入社式——再生」に従って物語の細部を次のように構造化している。



そして世界が英雄に求める機能によって、戦士、恋人、王、救世主、または聖者といったペルソナをもち、しばしばそれが複合しながら造型される。また世界回復のための犠牲という悲劇性を付与されるようになる。ケレニーも先に述べた著書の中で英雄崇拜からギリシヤ悲劇へと移行した原因は、英雄たちが担っている運命や苦悩の重圧のなかにある人間的要素が高められて何度でも悲劇の舞台にあげられ、古い素材が新しい震撼の場である悲劇の舞台に復活したのだと指摘する。当時読まれ

ていた英雄論であるカーライルの『英雄と英雄崇拜』は、その偏狭な清教徒主義の故にイエイツが常に敵対した書物である。古代の神々や英雄はすでに死滅し去ったもので、科学的知識の進歩によって終った過去のものであると断じ、宗教的情熱による改革者クロムウェルを頂点においたカーライルの熱狂的な英雄待望論は、イエイツにとって受け入れられることができないものだし、神格者——預言者——詩人——僧侶——文人——帝王といった順序に配列し、英雄のペルソナの諸相をあたかも歴史的な進歩の過程であるかのようにみなして解釈してしまうカーライルの英雄崇拜を、ケレーニーも英雄そのものには少しもかわらない興奮として返けている。

さて同じ時期に書かれた彼の評論のなかで、イエイツの英雄あるいは神話理解にかかわる点を指摘することにする。ストラットフォードで連続してシェークスピアの歴史劇を見た時の感想を「ストラットフォード・オン・エイボンにて」(一九〇一年)のなかで語っている。そこでイエイツはシェークスピア劇そのものではなく、当時のシェークスピア劇の演出法やその解釈を批判している。シェークスピアの歴史劇の主人公たちを歴史的な神話における英雄たちと考えるとき、彼らはあまりに小さくないで月なみな品性のよさをもち、ヘンリー五世風の理性的で見かけだおしの英雄になってしまつて、「イングランドが利をねらう冒険家や国民の無法妄想奇癖などによってできた国である」ことを忘れてしまつてい

ア朝好みの演出法よりも、むしろ神話が生きていた時代の猥雑な祝祭性をもった劇を再生させるべきではなからうかと提言する。そして晩年のシェークスピアについて愉快な空想を楽しんでいる。

ストラットフォード・オン・エイボンの住民は彼のことを少しも憶えていないし、彼の栄光に捧げるべき何の伝説も造り上げてはいない。彼が催した酒宴のことを覚えていて彼にあてたつまらない詩をいくつかこしらえているがそれで全部である。もし彼がひどい大酒飲みで働き者で、すごい馬の乗り手で、大声で悪態をつく地主でもあったなら、悪魔ととりひきをした男という伝説をつくつて、いやがうえにも彼の名声を高めたであろう。

イエイツの劇の現代性をその象徴演劇の側面からだけ論ずるのは片手落ちであろう。神話的祝祭性・祭祀性の回復が特に彼の後期の劇においてより根源的な演劇性を獲得している。

一八九七年に発表された「ウイリアム・ブレイクと想像力」はシェイクスピア論の第一章の内容と重なる。「想像力が美の不滅性によって私たちを死すべき運命から引き離し、すべての心の秘かな扉を開け放つことで私たちを互いに結び合わせる」、「罪あるものも正しきものもすべての生きものとの共感(sympathy)」であり、「生けるものすべて神聖であり」、「情熱は最も生きている故に最も神聖だ」と語るブレイクに神話の魂の讚美者をもっている。もう一つのブレイク論「ウイリアム・ブレイクと『神曲』の挿絵」(一九二四)はブレイクとダンテという「永遠に敵対して向きあう二つの精神状態を代表する」二人の詩人の出会いを論じている。ブレイクは「遙かな頂きから火をもたらそうと苦闘し」、「彼以前の誰よりも靈妙な恍惚と直観とを具体化しようと苦闘し」、「芸術的技法の

本性によってあらゆる生き物と心を通わせる (sympathise) ことを教えられた。³²⁰ これに対して「ダンテの靈感は彼が生きた時代から吹き上げられた哲学と混り合い」、この世を支配する哲学に屈従しなければならなかった。彼は軍人や俗人、政治に忙しい僧侶たちとその実生活の哲学を共有した。そしてブレイクの言葉を引用しながら、イエイツははっきりとブレイクの立場に立つ。「人の血の一血球よりも小さいあらゆる空間はこの草木の生え茂る大地がただの影でしかないような永劫のなかへ開いている」、また「動脈の一鼓動よりも短いあらゆる時は六千年に匹敵する、なぜならその瞬間に詩人の仕事が生じとげられ、時のあらゆる大いなる出来事が始まり、このような動脈の一鼓動という一瞬の間に胎まれるのだ³²¹」と語って瞬間的恍惚の中に開かれる生命の歌をたたえる。二十年以上後に書かれたこの論文でも彼のブレイクの読みは一貫していて、『神曲』の挿絵の中に二つの哲学の対決を読んで劇的である。こうしたブレイクの読みはシェリー論に引き寄せられていて、イエイツの詩論の中心にシェリーがいることを感じさせる。ずっと後年（一九三二年）に書かれたシェリー論「縛めを解かれたプロメシユウス」の第四節でこのことを次のように述懐する。

中年になってふりかえってみるとき、はるかに多くまた賛意をもって学んだブレイクではなく、彼（シェリー）が私の生を形成していたことを見出し、友人や知人の騷擾としばしば悲劇的な人生を思うとき、彼らのジャコピン党的熱狂、彼らの褐色のデーモンは彼の直接間接の影響に帰せられるのを知った。³²⁴

III 伝承文学と詩作

初期のイエイツの作品には『彫像の島 (The Island of Statues)』（一八八五年五月）や『探求者 ("The Seeker")』（一八八五年九月）のようなギリシヤ神話を扱ったもの、『モサダ (Mosada)』（一八八六年六月）のように中世スペインもの、『神について語るインド人 ("The Indian upon God")』（一八八六年）のようなインドもの、『ハルン・アラシッドの贈物 (The Gift of Harun Al-Rashid)』（一九三三年）のような西アジアものまたハンガリー神話に取材した「フェレンツ・レイイがいかに沈黙を守ったか ("How Ferencz Renyi Kept Silent")』（一八八七年八月）といった作品があるが、ここではアイルランドの伝承文学を主題やモチーフとする作品に限って、その制作または発表年代順に整理すると表Ⅵのようになる。一九〇三年以後は詩においては伝承文学に直接取材した作品は極端に少なく、「灰色の岩 ("The Grey Rock")」（一九一三年五月）、「夜明け前の時間 ("The Hour before Dawn")」（一九一三年十月）、「二人の王 (The Two Kings)」（一九一二年十月）「楽園に走る」（一九一三年九月）以外は部分的なモチーフの利用に終わっている。この年代を別途にし、また物語や劇中の歌は除いた。イエイツはこれら伝承文学を忠実な聞き書き、かなり自由な再話、自分で直接採集した題材にもとづいた創作、他の作家の作品や蒐集した素材にもとづく創作、そして広く知られた神話伝説を題材にした自由な創作、またいくつかのヒントをえただけのものまで含め、実に多様で、忠実な再現を目指すものではない。一八九八年十二月二十二日付のレディ・グレ

表VI イェイツが伝承文学に取材した作品

作または発表年月	作 品 の 表 題
1884	The Madness of King Goll
ca. 1885	Down by the Salley Gardens
1885-	<i>The Wanderings of Oisín</i>
1885-	<i>The Shadowy Waters</i>
Feb. 1886	Life
May, 1886	The Two Titans
1886	The Stolen Child
Jan. 1886	The Meditation of the Old Fisherman
1887	The Ballad of Moll Magee
Feb., 1887	A Dawn-Song
March, 1887	The Faery Pedant
Sep., 1887	She Who Dwelt among the Sycamores
Sep., 1887	The Fairy Doctor
1887	Love Song
May, 1888	The Phantom Ship
Dec., 1888	A Legend
1888	The Ballad of Father O'Hart
Nov. 1889	The Ballad of the Foxhunter
1889-	<i>The Countess Cathleen</i>
1889	Time and the Witch Vivien
1889	A Lover's Quarrel among the Fairies
1889	The Priest and the Fairy
Apr., 1890	A Cradle Song
July, 1890	The Ballad of Father Gilligan
Nov. ,1890	The Lamentation of the Old Pensioner
1891	<i>John Sherman and Dhoya</i>
Feb., 1891	The Man Who Dreamed of Faeryland
Sep., 1891	A Faery Song
Oct., 1891	The Countess Cathleen in Paradise
1892	To the Rose upon the Rood of Time
May, 1892	Fergus and the Druid
Jan., 1892	The Rose of the World
June, 1892	Cuchulain's Fight with the Sea
Oct., 1892	The Poet Pleads with the Elemental Powers
Dec., 1892	The Fiddler of Dooney

April, 1893	The Ballad of Earl Paul
May, 1893	The Danaan Quicken Tree
Aug., 1893	The Hosting of the Sidhe
Aug., 1893	The Moods
Oct., 1893	The Host of the Air (The Stolen Bride)
ca, June, 1893	Into the Twilight
ca, Jan 1893	The Song of Wandering Aengus
1894	<i>The Land of Heart's Desire</i>
Aug., 1894	Red Hanrahan's Song about Ireland
Aug., 1895	The Everlasting Voices
Aug., 1895	The Lover Asks Forgiveness Because of His Many Moods
Aug., 1895	Many Moods
Nov., 1895	The Lover Speaks to the Hearers of His Songs in Coming Days
1895	A Poet to the Beloved
1895	He Gives His Beloved Certain Rhymes
Nov. 1896	The Unappeasable Host
Apr., 1896	The Valley of the Black Pig
Sep., 1896	The Sacred Rose
Nov., 1896	He Reproves the Curlew
Nov., 1896	To His Heart, Bidding It Have No Fear
Jan 1897	He Tells of a Valley Full of Lovers
Apr., 1897	The Blessed
June, 1897	He Mourns for the Change That Has Come upon Him...
Feb., 1898	He Wishes His Beloved Were Dead
1898	He Wishes for the Cloths of Heaven
May, 1898	He Hears the Cry of the Sedge (Aodh to Dectora)
May, 1898	The Lover Mourns for the Loss of Love (Aodh to Dectora)
Oct., 1898	He Thinks of His Past Greatness
Dec. 1898	The Fish (Bressel the Fisherman)
Aug., 1900	The Withering of the Boughs
1901	<i>Baile and Aillinn</i>
Jan., 1901	Under the Moon
1901-	<i>On Baile's Strand</i>
1901	<i>Cathleen Ni Houlihan</i>
June, 1901	Under the Moon
1902	<i>The Pot of Broth</i>
1902	<i>Where There Is Nothing</i>
1902	<i>The Hour-glass [Prose Version]</i>
1903	<i>[Poetic Version]</i>
1903	<i>The Old Age of Queen Maeve</i>
1903	<i>The King's Threshold</i>
June, 1903	The Happy Townland
1906	<i>The Shadowy Waters [Acting Version]</i>

* ゴシックの年代表示は創作年代を示す。

ゴリー宛の手紙で、民話集編集に当って、「農民の語りと離れて、人の手を実際に形を整えて書いてゆくべきで、私はそうしたいと思う」と書き送っているし、ケルト主義に立つ女性名の神話作家フィオナ・マックレオッド(実名ウイリアム・シャープ)宛ての一八九一年一月(推定)の手紙でも「私自身の劇作についての詩的伝説的理論は現実的で細部に忠実なものではなく象徴的で装飾的背景であればよいと思う」と語っているが、詩作についても一八九五年を境に象徴的調子が高まり、モード・ゴンヤ「ダイアナ・ヴァーノン」⁸⁷⁾との愛が重ねられるようになって、その素材の民俗的固有性は象徴的抒情のなかに解消されて、もはや愛を歌うための枠組や背景以上のもではなくなる。

アイルランドの伝承文学の主題は多様な広がりを持ち、イエイツの想像の領域が拡大し素材から自由になるにつれて、いくつかのモチーフが複合されたり、構成しなおされたりする。人さらいを含む妖精物語、貴種流離譚を含む英雄物語、常春の国などの他界訪問、切迫した終末的ヴィジョンを背景にした宗教譚などがバラッド、物語、詩劇および対話詩などの文学形式によって表現されているが、そこにイエイツの工夫が加えられる豊かな土壌があった。一八八五年から八八年夏にかけて取り組んだ九〇一行の長篇詩『アシーンの放浪(*The Wanderings of Ossin*)』(一八八九年)はそうしたイエイツの意欲を反映した作品であり、劇形式の六七四行の詩『影深き海(*The Shadowy Waters*)』(一九〇〇年)も含めて、最も長い詩作品である。

アイルランドの守護神聖パトリックと英雄アシーンの対話という中世アイルランド文学の対話詩の形式にもとづき、マイケル・ロッシン(Michael Comyn)のゲール語の作品からの英訳“The Lady of Ossin in

the Land of Youth”(1859)を素材にしたものである。「この潮の逆巻くかなた、はるかな国」の妖精ニイアヴと恋におちた英雄アシーンが「常春の島」(*The Island of the Living*)すなわちニイアヴによって「舞踊の島」(*The Island of Dancing*)と呼ばれている島、「勝利の島」(*The Island of Victories*)、「忘却の島」(*The Island of Forgetfulness*)⁸⁸⁾に導かれ、三百年をこれら他界にすごし、老いさらばえて帰還して語る物語である。一九二二年の自註によると、これらの他界訪問譚はさまざまな国や時代の混沌により形成されていて、ある普遍性をもつものと考えていた。

ここに描かれているさまざまな出来事は……ある特定の世紀というよりも民話に描かれているさまざまな時代から成っている限定することのできない期間に起ったと考えられる。その結果、後のフェニアン物語と同様に古代と中世のもの多くが混りあうことになった。ゲール語の詩ではアシーンは一つの島しか行かないが、*Síva Gaelica*のなかのある物語では「四つの楽園」を描いている。すなわち北方の島、西方の島、南方の島、そして東方のアダム楽園である。⁸⁹⁾

この物語詩を簡単にたどってみよう。戦いに疲れた英雄アシーンは「情熱的なシーヴが石のように静かに眠る墓丘のかたわら」、「海が鳩のような灰色の水際をみせるところで」、「真珠のように白い、高貴な婦人を見た」

その唇は沈む陽

悲運の船に照る

嵐の落日に似て

シトロンの色はその髪に蔭る

この魔性の娘と共に「波立つ潮の洗う岸边」不死の国へ馬を駆る。この島には洞窟の象徴こそ見えないが、生命の泉と水の波動を豊かに伝える比喩に満ちている。

黄金の夕べの光のもと

不死なる者たちが動いていた

泉のほとり、川と森の古えの夜のかたわらに

ある者は山々の上を影のように踊り

ある者は手に手をとって漂った

また、夢見心地に青白い砂浜にすわり

おぼろげな星影のように立てた膝に

それぞれ額をふせて歌った

そして夢みるまなきで、

太陽が波路なかばにまどろみ

サフラン色に輝くあたりを見つめていた

楽園の自足した、それだけに平板なヴィジョンである。若者たちの舞踊の様子も頭韻がかえって生命感を感じさせず閉ざされた空間のなかで反響しあうだけのものになっているのを、次の詩行などが示している。

The dance wound through the windless woods;

The ever-summered solitudes;

第二巻は「闇にそびえる暗い塔」に向うことで始まる。そこを支配する魔物と戦い、「葬いのろうそくのように柔かい眼、月下の霧から作られたような顔、赤い蛾のように恐れおののく悲しげな唇をした乙女」を

救出する。「マナナン」と銘のある剣が与えられること(天佑神助)、変幻する魔物との戦い、勝利の宴、甦える魔物との反復される戦いと宴など神話的モチーフはそろいながら日常的な倦怠とつながっている。

第三巻は深い谷で巨人たちが永遠の眠りのうちにある「忘却の島」を訪れることになる。

ここに眠る者たちは、この深い草のなかに野営しているうちに、いかに広い世界との戦いに倦み、流浪の海の岸边を進むのに疲れ

鈴花の枝を手に取り、それを振って

人の思いを超えた眠りをむさぼったかを知った

アシーンも鈴花の枝の「あの音楽の波に包まれて」この巨人たちの間で妖精ニイアヴと抱き合って眠り、「私の悲哀のすべての記憶、私の楽しい記憶のすべては海水におおわれた石のように消え、ある柔らぎが星の光から生れ、私を骨の髄まで満たした」しかしこのニルヴァーナの眠り、「眠りをしたたらせる露 (their dew dropping sleep)」の世界からアシーンを目覚めさせたのは「大古からの人間の悲しさ (the ancient sadness of man)」であった。

イエイツはこの三つの世界を、恋人としての英雄、戦士としての英雄永遠の眠り、いわば死の訪問者としての英雄という三つのペルソナによって構成している。英雄の三つのペルソナが平面的に書き分けられただけで、その英雄像と三つの世界が物語の必然的な展開を生むように構成しきれていない。当初各巻にアレゴリカルな表題がつけられていたように、ケルト神話にもとづくロマン的寓話をめざし、その点では精緻な作品であるが、イエイツがシェリーの神話的作品のなかに見出したような、根源的な生命との一致を描く死にみまがう恍惚的時間体験と、象

徴による緊密な物語の構造といったものを表現しているとは言い難い。愛(舞踊)と戦いとニルヴァーナの眠りの世界は夢のなかの充足とその夢からの放逐によるロマン的失意(dejection)が同じ波長で反復され、複合的なベルソナをもつ英雄の機能を三つの空間に分割し展開したことでかえってその力を弱めている。超越的な体験の一回性が損われ、英雄の帰還は常に理由のない憂鬱の気分をとまなう夢からの放逐であり、ある力を賦与された現実への帰還ではない。むしろこの三つの島は現実の生、青春―壮年―老年すなわち愛―戦い―安息のユートピア的夢幻的表現と読む方がよいであろう。一八九一年に発表された「妖精の国を夢見た男」(「The Man Who Dreamed of Faeryland」)ではっきりと四つの連で死を含めた人生の四つの段階での楽園が歌われている点ではこの作品と同様であるが、それが現実の生に介入して劇的な緊張感をもつ作品となっていて、かえってこの長篇よりは優れている。

しかしそれでも楽園は自己充足的な固有空間として描かれて、その音韻の反響的效果はモノトーンの閉鎖された鏡面を思わせる。一例をあげると次のようである。

Whatever ravelled waters rise and fall

Or stormy silver fret the gold of day,

And midnight there enfold them like a fleece

And lover there by lover be at peace.

農民のなかで生きる漂泊詩人たちの相貌は『ケルトの薄明り』(The Celtic Twilight) (一八九三年) に収められた物語に豊かに伝えられて

いるが、第一話「物語りの語り手」(“A Teller of Tales”) で描かれるパディ・フリンという伝承者は印象的である。彼は小さな明るい眼をした老人で、本人がスライゴ州で一番りっぱな土地というバリソダール村の雨漏りのする一部屋きりの小屋に住み、カンに茸を入れて暖炉で煮て食べ、生垣の下で微笑を浮べて眠る暮しぶりである。いつも陽気でしわばんだまぶたのしたの、兎のようなほしこい眼には、「喜びと紙一重の憂鬱、純粋に本能的な性質と、あらゆる動物がみせる幻を見るような憂鬱」がある。老年と奇矯と耳の遠さという三重の孤独のなかで子供たちにつきまとわれるなど生活の苦労が多い。そうしたなかで多くの不思議な光景を見る力をもっているという。このような老人の向うにイエイツは放浪詩人赤毛のハンラハンの伝説を想像し、一連の物語にまとめたのが『赤毛のハンラハン物語』(Stories of Red Hanrahan) (一八九七年) である。一九二五年に加えられた序文によると、世紀末風の技巧的な英語で書かれていたものを一九〇七年にグレゴリー夫人の努力でゴールウェイの農民風の簡潔な英語に書き改められて今日の形になったという。このことで「フランネルを着た気性の激しい老人」についてのスライゴの物語素材がアイルランド西部の英語と結びついたのである。恋人メアリー・レイベルを棄てて、不思議な老人が切った一枚のトランプが兎に変わると次々と他のカードが猟犬に変わって後を追う。ハンラハンもその後を追ひ、美しい女と四人の老婆に出会い、四人の老婆からトランプの四つの札によって、「快樂」、「権力」、「勇氣」、「知識」を示されるが、この姫をえるに足るそれらの能力がなく眠りに墮ちる。この他界訪問の経験の後、ハンラハンの物語と歌と踊りと色恋沙汰は村人から時に忌まわれ、また時に祭や婚礼のハレの客人として歓待されながら、村々をまわ

り、村人の情念や隷属する国の呪いを体現する様が豊かに語られる。そして破れた古代の神々である妖精たち、群なる死者たちの世界を幻視するハンラハンは「心臓の一鼓動の間に永遠の通路が開きふたたび閉じる」時を体験する。老いたハンラハンは一人の狂女の家で、「湖の中心の静けさのような大いなる静寂」のなかで、別の世界の音楽と光と霧に包まれながら死を迎え、村人に大いなる詩人として葬られる。英雄詩人としての神話的構造が土俗的生気の中で息づき十分に実現されていて、イエイツの詩人としての生涯の夢がここに過不足なく語られていることを感ずる。『ケルトの薄明り』のなかの一章「路傍にて」ではキルタータンの路からはずれた広場で、アイルランドの民謡を歌う老人とそのまわりで輪をなして踊る若者たちを見ながら、イエイツはその声が薄明りに溶けて、木々と混り合い、幾世代の人々の間に混り、やがて楽園の水脈深くくぐって、生命の樹に到るのを実感する。

実際、民俗芸術は思想の貴族のうち最も古いものであり、ただはかなく過ぎ去るものや卑俗で不誠実なものだけでなく、気がきいただけの見映えのよいものをも拒んで、幾世代のうちで最も単純で最も忘れたがたい思想を己れの内に集めてきた故に、あらゆる偉大な芸術が根づく土壌である。⁽⁴⁰⁾

貴族と農民によって守られた民俗芸術に詩人の手が加えられ、精神の貴族性、すなわち「生活における礼節と沈着、芸術における文体」⁽⁴¹⁾を「英雄的行為」のなかに数えあげる。

三つの型の間があらゆる美しい物を作った。貴族が美しい礼節を作ったのは世界における彼らの地位が実人生の恐れを超えたところに彼らを置いたからだし、農民が美しい物語と信仰を作ったのは、彼らが

失うものや恐れるものを何ももたなかったからだし、芸術家がそれとはちがう美しいものを作ったのは神の恩寵が彼らに向う見ずにしたからである。これらの人々が長い伝統をかえりみたのは、恐れを知らぬ故に彼らを喜ばすことに心をつないだからである。⁽⁴²⁾

イエイツが貴族的と呼び英雄的と考えたのは、人生の恐れを超えた心の境地であることがわかる。それが古代の根源的生命との一致を求める力となり、喜びと美の伝統を受け継ぐ力となる。

IV 大いなる生命との一致

一八九五年夏に着手した『影深き海 (The Shadowy Waters)』は先に「シェリーの詩の哲学」で述べたような、すべてのものがある肉体の甦りの一部となるような美的体験、死者か恍惚のうちにある魂に与えられる強烈な時間を主題にした作品である。一八九六年一〇月には出版する形に完成し、それ以後手が加えられて、一九〇〇年に劇形式によった詩として出版された。そしてイエイツがアメリカに滞在中に初演されたが、帰国後一九〇五年に全面的に書き変えられて、一九〇六年に『詩集一八九九—一九〇五』に劇形式の詩として出版され、舞台用の版が一九〇七年に別に出版されるといったように何度も改訂され続けたという点で、イエイツの初期をおおむね重要な作品といえる。集註版でその改訂の後をたどると、改訂のたびに、表現はより直截で明確になって、「不能なものを求める恋人の願い」、「超自然的な強烈さと幸福への愛」の一点に集中される緊迫した劇的力が強まっている。イエイツ自身がこの作品の主題と梗概を『弓矢 (The Arrow)』誌に寄せているのでその一部を

引用する。

かつて白鷺が老人たちの髻に巢を営んでいた昔、古代アイルランドの海の王フォーゲルは人の頭をした鳥たちに超自然的な強烈さと幸福への愛を約束された。これらの鳥は死者の魂であり、彼はこの鳥の後を追って、鳥たちの最後の安息がある日没の方向に船を進めた。鳥たちの言葉が聞きたければ魔法の堅琴によって自分のまわりに集めることができた。同行した友人エイブリックと船員たちは彼を狂っていると思ひ、その神秘的な幸福は死後にのみ訪れることであり、自分たちは彼といっしょに破滅へと誘われていると思つた。間もなく彼らは一艘の船を捕え、美しい女がその船に居ることを知つた。フォーゲルは堅琴の調べて彼女と反逆する船乗りを静めた。船乗りたちはもう一艘の船に逃げ移り、フォーゲルと娘が鳥に従つて漂ひ、死と死の後に來るもの、あるいは肉の神秘的な変様とあらゆる恋人の夢の受肉へと向つた。⁶⁴⁾

愛の情熱を生むある永遠の存在を求める英雄フォーゲルと王妃デクトラとそれを夢にすぎないと主張する現実の生に足を置いたエイブリックとの劇的な對話が、人頭の鳥たちと水夫が象徴する二つの世界が舞台の上で交錯する、その境界の闘の上で交わされ、やがてフォーゲルたちが死とも恍惚とも呼べるその境域を超える体験に表現のすべてがかけられている。エイブリックがそうした実在は夢幻であり、恍惚から覚めたドルイド僧か死者かまたは未生の者が証すだけで、それを求める者は死なざるをえないと説くのに對して、フォーゲルはある経験を語る。

私にもはつきりとは見えない、すべては神秘的なのだ
だが私の頭には時々炬火が点り

すべてを明らかにする。しかし明りが消えると

ただイメージと類比物だけが残るのだ

神秘のパン、秘蹟の葡萄酒

十字架が内に交わる赤いバラ

肉体と魂 覚醒と眠り、死と生

古代の類比者が定めたあらゆる意味が

一つの喜びに混り合つた

なぜならバラはそれ以外のものではない

奇跡の叫び、神秘的な結婚の古き物語

不可能な真理。しかし炬火が点ると

不可能なものがすべてが確かになり

私は深淵に身をおどらせる

ここでバラの比喩で語られたものは一九〇六年版では魔法のリングといふ弱い比喩のままであり、一人の女との愛の心理描写にとらわれて、象徴的喚起力は弱い。ここにおける「炬火」の比喩は恍惚の瞬間をとらえてみごとである。この劇の最後に引き綱を切つて闘を超える時デクトラの決別の詩は双方のテキストに違いはなく、原罪の蛇を思わせる綱を断つ決意の歌は悲劇的な美しさをもつ。

綱が綱を切る

綱が二つになつて 海に落ちた

それは渦を巻いて泡となった おお古き虫よ

この世を愛し私たちをこの世につないでいた竜よ

おまえは切られた 切られてこの世は私から漂い離れ

私は、いとしい人と二人だけになつて

永遠に彼の眼から遠ざけられることはない
フォーゲルよ 私は笑う

この作品には『アシーンの放浪』のように他界での経験は描かれていない。しかし愛と冒険へ出発する意志の鮮やかな決断はみごとに表現されて英雄悲劇として耐えうる作品となっている。

先の拙論⁴⁵⁾で恍惚の時を描くことにイエイツは極端に用心深く、言葉をはぶいた象徴的な表現を使って、ロマン派詩人たちのように歓喜を心理的に描くことを避けていると指摘したが、これは劇においても同じことが言える。詩から上演を目的にした台本に書き変える時、全体で100行あまり短縮されるが、イエイツの方針は詠嘆的表現を先の引用にみられるように秘教的な伝統に沿った象徴にしぼりこんで、役者の演技に対応させてゆくことであつた。⁴⁶⁾

さてイエイツの散文に瞬間的であれ大いなる生命との一致を経験したことがどのように書かれているかをたどってみたい。最もくわしく語られるのは『月の沈黙を友にして (Per Amica Silentia Lunae)』(一九一七年)の「世界靈魂」の二十一章で、一瞬心に燃えるというプラトンの飛び火の象徴はシェリーと結びつけられている。

シェリーが私たちの心を「すべての人が渴望している火を映す鏡」と呼んでいるのを思い出すとき、私はすべての人が問うたこと、「何がそして誰が鏡を割ってしまったのか」と問わざるをえない。私が知りうる唯一の自我である私自身を研究し、ふたたび糸巻きに糸を巻きはじめた。常に予期しないある瞬間に私は幸せになる。何気なく詩集を開いたりした時がほとんどだが、時々それが自分の詩集であることもある。そうした時、新たに技術的きずを見出すのではなく、初めて書

いた時と同じ興奮のうちに読む。ふだん人の混み合ったレストランでかたわらに本を開いたりあるいは閉じたままにして座っている時、私の興奮は頁に満ち溢れた。生れてずっと知っている人のように私は近くの見知らぬ人を見る、そして彼らに話しかけられないのが不思議に思える。すべてのものが私を愛情で満した。私にはもはや恐れも欠乏もない。私にはこの幸福な気分が終るものだとは思われない。媒体が突然澄み渡って遙かに広がり輝いて、「世界靈魂」からの形象^{イメーグ}がそこに受肉し、その甘美さを飲み、鬼火を自分の薬屋根に投げた田舎の酔漢のように時を焼き尽しそうであつた。⁴⁷⁾

媒体とは降霊術独特の用語であるが、霊が化肉する質料をいう。この至福の時をイエイツは「動揺 ("Vacillation")」のなかで次のように表現する。

私の五十年目の年が来て去つた

私は一人の男として

混んだロンドンの店に座り

大理石のテーブルに

本を開け、空のコップを置いて

店と通りを眺めていると

私の身体が突然燃えた

そして二十分かそこら

幸福感はとて大きかったので

私は祝福されまた祝福をほどこすことができるように思えた

「私の身体が突然燃えた」の直截な一行のみで、「二十分ばかり」と量るように言い棄てると、「……のように思えた」と放心と同時にアイロニ

一の調子もこめながら「動揺」の振子を揺り戻している。この時と同じような「経験の強烈さ」はR・エルマンも指摘する通り一九三一年十一月二十三日のオリビア・シェックスピア宛の手紙にも記録されている。

『幻想録』を執筆していた時、なかでも最も高い観念を思索して、日没後大きな樹木の間を散歩していた時、突然その理解に達したと想われる時、バラの香りをかいだという。そして「私は今、時を超えた霊 (the timeless spirit) の本質を認識した」その興奮は「あの秋の色合いに美しい古き輝き (that old glow beautiful with its autumnal tint)」を見た。この「時を超えた霊」は『幻想録』のなかで「第十三円錐」と呼ばれているもので、生の円環を超えた存在の絶対的合一、象徴的結婚の時を表現している。この時の体験をもとに一篇の詩「狂ったジェーンと職人ジャック (“Crazy Jane and Jack the Journeyman”）」を書いたが、それは「その時の体験のそまつな影でしかない」と述べている。この神秘的な作品では肉体を霊と霊をつなぐ糸巻きの比喻で表現し、愛の恍惚はこの世でその糸巻きがほぐれることであり、死の恍惚は「この世における愛の糸巻き、墓場の肉体」である私が、母の胎内で見失った光の中に飛びこむことであり、糸巻きに結び合わされた二つの霊が死んだ後も共に歩くにちがいないとその歎びを語って、オリビアへの愛をうたう。この糸巻きの比喻は先の引用文でも使われているが恍惚の時を示す表現としてイェイツの作品に表われることは前述の拙論「W・B・イェイツ論(一)」で述べた。

こうした「恍惚」を説明した部分が同じ『月の沈黙を友とし』の「人間靈魂」の五章にある。修辞と詩との相違を説明したあとで、「他我、反対我または対照我 (the other self, the anti-self or the antithet-

ical self)」が現れるのは、その人のもつ情熱 (Passion) が実在そのものである人々に対してだけだと語った後、

悟り、幻視、^{ワイルド}実在の顕現といった言葉の代りに、伝統は私たちに別の言葉を与えている、即ち恍惚^{エクスタシー}である。ある老画家がニューヨークの埠頭の近くを放浪していた時、病んだ子供をあやす女と出会い、その女から物語を聴き出したいきさつを書いてよこした。彼女はまた他の死に別れた子供たちのことも話した。長い悲劇的な物語であった。彼は書いている——「私は彼女を描きたかった、もし私自身に苦痛を拒むようなことがあれば、私自身の恍惚をも信じられないだろう」……あらゆる想像しうる苦悶に耐えたものだけが、想像しうる最も偉大な美を創造できる。というのは恐るべきものを見たり予知した時はじめて、私たちは目もくらむ、予見できない、あの翼なす足をした放浪者 (wanderer) から良き報いをうけることになる。彼が私たちの存在の感覚のなかに入り、しかも私たちの存在はあくまでも火に対する水の状態、沈黙に対する騒音の状態であり続けるのでなくては、彼を見い出すことはできないのだ。彼はあらゆるもののうちで不可能ではないにしても最も困難なものである。⁵¹

先の引用文で「火を映す鏡」という比喻がここでは水の状態と説明されている。また「放浪者」とは「反対我」として訪れる実在についてのイェイツ特有の表現であるが、そうした予知を超えた至福の出会いを「あらゆるものうち不可能ではないが最も困難な」ことだという。この “not impossible but the most difficult” という表現は詩篇「月の諸相 (“The Phases of the Moon”）」で二度くりかえされる。そのなかで半月に到るまでのそれぞれの形相にある人々は、夢をとおして働きか

けるダイモンのうながしによって、「鳥や獣のように」幸せな冒険へと駆けこんでゆくが、半月を過ぎ、満月に至るまでの形相にある人々は「ぎらゆる熱狂 (whim) のうち不可能ではないが最も困難な熱狂」へとかりたてられる英雄の形相に入る。そして満月を過ぎて次の半月に至るまでの形相にある人々は、「ぎらゆる仕事 (task) のうさで不可能ではないが最も困難な仕事」を選ぶ智者たちの形相に入ることになる。こうした悲劇性を帯びた英雄的いさおしを表現する形容である。晩年のイエイツはインドの賢者スワミと出会うが、スワミの著書「インドの修行僧」の書評（一九三二年）でスワミの悟りの世界を「数年に引き延ばされた英雄的恍惚の情熱 (heroic ecstatic passion prolonged through years)」と表現しているのも同じ経験の表現である。そして「放浪者」という比喩は「群なす情緒 ("Emotion of Multitude")」（一九〇三）のなかで次のように語られる。

実際、すべての偉大な巨匠たちは常に単純であればあるだけよりよいものになる寓話という小さな限定された生命と、それを超えた、なかばしか見えない世界の、豊かで遙かにさまよう (far-wandering) 多くの形象をもった生命とがなければ偉大な芸術にはなりえないことを理解していた。⁶⁰

この他にもアイルランドの豊かな演劇的風土を探った文集『発見 (Discoveries)』（一九〇七）の随想「聖者と芸術家について」や「二種類の禁欲主義」にも「恍惚」についてイエイツら「思索を見ることかきむ。詩における英雄的行為における「恍惚」体験と物語における「放浪」のモチーフは、遙かにさまよう大いなる生命との一致というテーマのためには、イエイツにとって不可欠なものであった。

[註]

- (1) *The Uncollected Prose of W. B. Yeats* (Macmillan, 1975), Vol. II, pp. 495-9.
- (2) A. Norman Jeffares, *A Commentary on the Collected Poems of W. B. Yeats* (Macmillan, 1968), pp. 14-5.
- (3) *Ibid.*, p. 14.
- (4) *Ibid.*, p. 3.
- (5) *The Collected Poems of W. B. Yeats* (Macmillan, 1963), p. 523.
- (6) *Letters*, p. 38.
- (7) *Ibid.*, p. 88.
- (8) W. B. Yeats ed., *Fairy and Folk Tales of Ireland* (Macmillan, 1973) 注、マクミランの編集による民話民謡集の再版であるが、これはキャサリン・マクミランの注や序文がある。また Mary H. Thunente, *W. B. Yeats and Irish Folklore* (Gilland Macmillan, 1980) を参照した。
- (9) *Fairy and Folk Tales of Ireland*, p. 6.
- (10) *Autobiographies*, p. 178.
- (11) *Ibid.*, p. 179.
- (12) *Letters*, p. 214.
- (13) "The Prisoners of the Gods" *The Uncollected Prose of W. B. Yeats* (Macmillan, 1970) Vol. II, p. 74.
- (14) "The Broken Gates of Death", *Ibid.*, p. 95.
- (15) *Essays and Introductions*, p. 518.
- (16) *Ibid.*, pp. 55-56.
- (17) *op. cit.*, p. 100-101.
- (18) *Essays and Introductions*, p. 65.
- (19) *Ibid.*, p. 65.
- (20) *Ibid.*, p. 71.

- (21) *Ibid.*, p. 78.
- (22) 『ギリシヤの神話—英雄の時代』中央公論、昭和四十九年、二十三頁。
- (23) 同書、二十四頁。
- (24) *Essays and Introductions*, p. 516.
- (25) *Ibid.*, p. 94.
- (26) Joseph Campbell, *The Hero with a Thousand Faces* (Princeton U. P., 1949)、平田武尊、浅輪幸夫監訳『千の顔をもつ英雄』人文書院、一九八四年、上巻「プロローグ」参照。
- (27) *Essays and Introductions*, p. 104.
- (28) *Ibid.*, p. 110.
- (29) *Ibid.*, pp. 112-13.
- (30) *Ibid.*, p. 128.
- (31) *Ibid.*, p. 127.
- (32) *Ibid.*, p. 129.
- (33) *Ibid.*, p. 135.
- (34) *Ibid.*, p. 424.
- (35) *Letters*, p. 305.
- (36) *Ibid.*, p. 280.
- (37) 一八九五年に知り合い生涯の友であり恋人であったオリビア・シェックスピアにイエイツがつけた呼び名である。この点について拙論「W・B・イエイツ論(Ⅲ)」本紀要第十八巻(昭和五十九年十二月)の四十九頁の註(四)に誤解があったことを訂正する。
- (38) *The Wanderings of Oisín and Other Poems* (1889) にのみ三巻それぞれにこうした題名がつけられていたが、一八九五年の『詩集(Poems)』から題名がけずられ、詩句の大幅な改訂がなされ、その後詩集改訂のたびに少しづつ手が加えられ続けた。cf. *The Variorum Edition of the Poems of W. B. Yeats* (Macmillan, 1957)
- (39) *The Collected Poems of W. B. Yeats*, p. 538.
- (40) *Mythologies*, p. 139.
- (41) "Poetry and Tradition", *Essays and Introductions*, p. 253.
- (42) *Ibid.*, p. 251.
- (43) *The Variorum Edition of the Plays of W. B. Yeats*, pp. 340-1.
- (44) *Ibid.*, p. 340.
- (45) 「W・B・イエイツ論(Ⅰ)」『島根大学教育学部紀要』(人文社会科学)第十四巻、五六—七頁。
- (46) *op. cit.*, pp. 340-1.
- (47) *Mythologies*, pp. 364-5.
- (48) *The Identity of Yeats* (Macmillan, 1964) pp. 269-70.
- (49) *Letters*, p. 785.
- (50) 全詩集版の最終行が "Mine [My ghost] must walk when dead" となっているが、書簡集の脚註にもなり "They [Our ghosts] shall walk when dead" となっている。(Letters, p. 785)
- (51) *Ibid.*, pp. 331-2.
- (52) *Essays and Introductions* p. 436.
- (53) *Ibid.*, p. 216.

(島根大学教育学部英語研究室)